

日本新産種コキララダマシ

Coprinellus xanthothrix

吹春 俊光

本種の胞子はマメ形(お腹がへこんでいるような形)であるため、私は長いあいだ同じ形の胞子をもつコキララタケと混同してきました。そして、最近コキララタケの学名を、これまで図鑑で使用されてきた *Coprinellus radians* ではなく、*C. domesticus* とすべきということ(新しい図鑑では既にそうなっていますが)、談話会の会員さんと一緒に標本と遺伝子情報で整理しようとしていたところ、本菌 *C. xanthothrix* (Romagn.) Vilgalys, Hopple & Jacq. Johnson の存在を知ることとなりました。

本菌とコキララタケとの区別点は、本種の胞子がより小形であること、コキララタケが太めの腐朽材上に黄色のオゾニウム(菌糸叢)を伴って発生(時に群生)することに対し、本菌が細い落葉樹の枝から発生(単生することが多い)すること、黄色の菌糸叢をほとんど伴わないこと、傘の上の外被膜の束がより細く濃色であること、などで区別できます。驚くべきことに、あの青木実さんは本種と思われるものを未知種(*Coprinus* sp.)として青木図版に掲載していました(青木 1981)。和名はこの青木さんによるものです。気がつかなかった私は、はずかしいです。ということで日本新産種(吹春ら 2022)として報告しましたが、目録に学名を列挙しただけなので、この報告をみても詳しくは何も書いてありません。近い将来、顕微鏡図とともに詳しい報告ができればと思っております。ちなみに、種小名は *xanthus* (黄色の) + *thrix* (毛髪) とのこと。



コキララダマシ

A: 2020年10月2日、房総のむら、FB-44952 [CBM]

B: 2020年10月5日、千葉市泉自然公園、FB-44990 [CBM]

【文献】

- 青木実. 1981. 日本きのこ図版No. 1143 (1)-(4) コキララダマシ. 日本きのこ同好会.
- Uljé CB (2005) 1. *Coprinus* Pers. In: Noordeloos ME, Kuyper THW, Vellinga EC (eds) Flora Agaricina Neerlandica, Taylor & Franics, Boca Raton, pp. 22-109.
- 吹春俊光・腰野文男・大野将史・佐野悦三・P. T. Nguyen・N. H. Nguyen・清水公徳 (2022) 県立房総のむらの大型菌類相. 千葉中央博研究報告16: 23-47.